
真剣で茜に恋しなさい！

九十九迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で茜に恋しなさい！

【Nコード】

N5022Y

【作者名】

九十九迅雷

【あらすじ】

川神市には昔、現在の九鬼家には劣るものの、それでもそれなりの権力を持っていた名家、龍崎家があった。

その龍崎家の双子、龍崎茜と龍崎旭。2人は仲良くなった風間ファミリーの面々と楽しく穏やかな暮らしを送っていたのだが…。

彼らが12歳のときのある日、父親の株の失敗による借金が原因で龍崎家は没落する。

旭を川神鉄心に託した後、茜は何も残さずに川神市から姿を消した。茜の行方を知るものは誰も居ない。

それから月日が経った今、龍崎もとい川神旭は変わらず風間ファミリーたちと平和な日常を送ろうとしていた…。

しかし、兄の茜はもうすでに動き初めて居たのである――。

注意 作者は原作未プレイの為、知識が不足しています。情報源は動画やアニメのみです。

ですので口調や設定が時々微妙になっているかも。ご了承ください。主人公はオリキャラになっています。ところどころ台本形式になります。

主人公の茜は燕が、その弟旭は百代がヒロインです。最終的にハーレムにはしない予定。

第0話 茜の旅立ち（前書き）

プロローグです。
違和感あるかも。

第0話 茜の旅立ち

ここは中東の亡国である。

最近まで政権の争いが頻発しており、ついには傭兵を雇った内戦にまで発展していた。

そんなこの国の砂漠で、少年は累々と横たわる屍の真ん中に、突っ立っていた。

何処か神秘的な美しさの茜色の髪に端正な顔立ち。こんな殺伐とした光景には恐ろしく合わない美少年である。

「居たぞ！ アイツだ！」

屍たちの援軍だろうか。軍服に身を包んだ男たちが素早い動きで少年の周りを取り囲んだ。

取り囲む男たちを見回して少年はため息をついた後、面倒くさそうな面持ちで一言だけ発する。

「……さつさと来い」

ただただその一言だけ言うと。少年はその目を閉じた。

言葉は発さなくとも「お前ら如き、目を瞑っていても勝てる」という意味の彼の挑発であった。

「舐めるなあああああ！……！」

激昂し、殴りかかってきた男のパンチをかわし、それと同時にピンポイントに蹴りを決める。

それだけで、その動作だけで。少年の实力は圧倒的だというのがわかる。

結局、少年はすべての敵を一撃で平伏させた。

目を開けることもなく、当たった敵の攻撃は0。

「退屈。4年ぶりに日本に帰るかな？」

その少年龍崎茜。日本への帰還を気まぐれで決定する。

主人公設定（前書き）

龍崎茜&旭の紹介です。

うん、とってもシユールだ。

主人公設定

「……シベリアに直送か、今ここで死ぬかを選ばせてやる……」

【名前】りゅうじざき 龍崎 茜 あかね

【身長】 178センチ

【血液型】 A型

【誕生日】 1月11日 やぎ座

【一人称】 俺

【あだ名】 アカネ アカ兄さん（旭限定）

【武器】 主に拳もしくはスペツナズナイフ（バリステックナイフとも言う） 世界にする武器なら一応なんでも使える

【職業】 21F

【好きな食べ物】 基本食えればなんでも 松永納豆

【好きな飲み物】 飲み物と許容できるものなんでも 強いて言えばコーヒー

【趣味】 料理 人間観察

【特技】 バイクの運転ができる

【大切なもの】 松永燕 龍崎旭 風間ファミリーのメンバー

【苦手なもの】 金全般（父親の借金で）

【尊敬する人】 スターリン

龍崎兄弟の兄。

5年前、12歳のときに父親の作った借金が原因で家が没落した過去を持つ。

その後彼は川神市を出てロシアに辿り着く。

ロシアのシベリアで1年修行をした後スペツナズの隊員になり、その後傭兵として世界を転々としていた。

武道の腕前としては 茜>百代 の比率。

日本を出てから4年後、「退屈」というだけで再び日本に戻る。

よほどの相手でない限り本気で勝負が出来ない。

そのためいつも目を瞑って戦闘しており、それに慣れた所為で日常生活でも目を閉じて出来るらしい。

軽い戦闘狂で、サディスティックな笑顔を見せることも。

洞察力や観察力に優れていて、些細な事に気付いていることが多い。

元々性格はクール。気に入った人間や認めた人間にはちゃんと口を聞く。

燕だけは口数が他よりも増え僅かだが表情の変化も見せる。彼なりの信頼のようなものらしい。

不良を叩きのめした際松永燕と出逢う。

その後借金で負われている松永親子を助けたところから彼らの付き合いが始まる。

容姿は細めの二重の目にキメの細かい白肌。容姿は少し大人っぽいかなり整った容姿と言える。

髪はヨーロッパ人みたいなセミロング。ヘタリアのスイス見たいな髪形。色は7割が紅で3割くらい銀がメッシュになっている。目の色は青色。

声のイメージとしては日野聡さん（銀魂の神威をイメージすると良いかも）。

「アカ兄さんより弱くても、僕には僕の強みがあるんだ」

【名前】 川神 旭 かわかみ あさひ

【身長】 176センチ

【血液型】A型

【誕生日】1月11日 やぎ座

【一人称】僕

【あだ名】アサヒ 弟（茜限定） 龍崎弟

【武器】拳

【職業】2 - F

【好きな食べ物】ア力兄さんの作った料理 和菓子

【好きな飲み物】お茶

【趣味】読書

【特技】速読

【大切なもの】龍崎茜 風間ファミリーのメンバー

【苦手なもの】金全般（父親の借金で）

【尊敬する人】川神鉄心

龍崎兄弟の弟。旧名は龍崎 旭。

5年前の事件で兄によって川神院に預けられ、そのまま養子となる。百代のことが5年前から好き。

武道は兄と同じく才能があったようで、川神流を使う。レベルとしては 百代 旭 くらい。

兄とは違い性格はおおらかで誰にでも優しく接する。

容姿は兄とほぼ同じだが、髪の色は銀。

声のイメージは福山潤さん（WORKING!!の小鳥遊宗太くらいの高さが理想）。

第1話 茜京都に立つ（前書き）

茜は見た目が中世的なイメージ。ロウきゅーぶの美星さんをもっと少し男に近づけた感じ？

それはともかく第1話です。

あと余談ですが、マジ恋Sをアマゾンで予約しました。初回限定版で8,526円まで下がっていたので。

第1話 茜京都に立つ

茜Side

あの戦闘の後、ロシア軍が極秘で出してくれた輸送ヘリに乗って日本に帰国した。

まあ「観光がしたい」って乗り合わせたロシア軍兵士が言い始めて、行き先が京都になったんだが。

そいつ等とはもう別れて、今は1人でふらついている。

ファッションなんて物に気は使っていないかったが、一応スニーカーとジーンズを使っている。

……上着はTシャツの上に軍服を羽織っているのだがな。

しかし、先程から妙に様々な視線を感じる。

軍服を着ていると言う理由だけならここまでひどいと言う事は無いはずだ。

三人称Side

古い町並みの中を歩く茜は、注目の的となっていた。

日光をまばゆく照り返す茜色を主にした銀メッシュ入りの髪。

細めの二重によく通った鼻筋、クリっとした青い瞳の整った容姿。

女性ですらが羨みそうなシミ1つない透き通った白肌。

そんな美少年が視線を集めるのは頷けることだったのだが、彼はそこまで気にしていないため、わかってはいない。

「おい、兄ちゃん」

そんな茜を気に入らないと言った様子で、彼の前には所謂不良が立ち塞がる。

さっきまで周囲から茜に向けられていた好奇の視線は同情のそれに変わる。

それを気にせず行こうとするが、不良の手が右手を掴んでそうはさせまいとしている。

茜は大きく息を吐いた。そして哀れなものを見る絶対零度のような視線をその不良に対して向け、ただ一言だけ言った。

「俺に何の用だ」

ほんの少しだけ殺気を混ぜただけの視線に不良は動揺を見せた。

「お、俺今ち、ちちよつと苛ついてんだよ。だから少し………相手してくれやあああ……！」

半ばやけくそで不良は拳を振りかぶり、殴りかかる。

だが…。

「弱いよ」

それが茜に届くことはまず、あり得なかった。茜はそれを軽々と左手で受け止めた後。

ロシアの格闘技であるコマンドサンボで鍛えられた隙の無い後ろ回し蹴りが不良の顎をピンポイントで打ちぬいた。

K1ファイターどころか現役の軍人でさえKOするようなその蹴りを喰らうのは、ひとたまりもないことだった。

ドサリ。

不良が地面に倒れ伏したのを確認すると、茜は何事も無かったかのようにその歩みを進めて行った。

「あ、君、ちょっと待って！」
そんな彼に、少女らしき声が掛けられた。
まさかその少女が今後の人生に深く関わるなど、茜はこの時知る由も無かった。

第1話 茜京都に立つ（後書き）

一応書き終えました。

茜「駄文だな。随分」

迅（作者）「ひ、ひでえ……」

茜「で、最後の少女って誰だ？」

迅「うん、君の将来のお嫁さんじゃないかな。ヒントは鳥の名前だね」

茜「顎を砕かれたいのか？」

迅「いや本当にそうする予定……ってちょっと待って、コマンドサンの構えを取らないで！？
後ろ回し蹴り打つ気満々だなオイ！」

茜「5, 4……」

迅「カウントダウン！？ ああああ、と、とりあえずこのへんで失礼します！」

し、死んでたまるかああああああ！……！」

第2話 茜は燕に出逢った（前書き）

はい、サブタイトルからしてもうあの人しかいないです。

第2話 茜は燕に出逢った

茜Side

安い喧嘩をふっかけてきた不良をコマンドサンボの一撃必殺である
後ろ回し蹴りで叩き潰した。

……うん色々あれだ、ストレス、溜まってたんだよ……。と言っ
ても、手加減して1割程度の力だったから物足りない気はする。
つか俺に喧嘩売るならもつと強くなるか、相手を選べってんだ。

「あ、君、ちょっと待って！」

不良がピクリとも動かないのを確認した後立ち去ろうとしたのだが、
女の声で呼びとめられた。

振り向くと、白い制服（多分、川神学園の制服だと思う）に身を包
んだ女性が居た。

顔立ちは整っており、所謂美人。川神学園の制服に身を包む人間な
ら多少の武はあるだろうな。年齢は見る限り俺と同年代か1つ上く
らい。

活発そうな雰囲気を持っている………なんと言うか猫みたいな印象を
受ける人だ。

「何か？」

俺が表情を変えずに尋ねると、その女性はニッコリと綺麗な笑顔を
浮かべた。なんとなく、人を幸せにさせるような笑みである。

「今の回し蹴り、すごかったね。ちょっと話聞かせてよ」

「ん…？ 別に構いませんが」

その女性に連れられ、俺はそこらの喫茶店に入る。

その際も主に女性の視線を感じた。……軍服ってそんなに浮くのか？

「私は松永燕。あ、松永納豆の宣伝で、納豆小町って呼ばれてるよな、納豆…なんだって？ 3、4年も離れるだけでこうもわからないくなる物なのか？ 時の流れや流行り廃りは恐ろしいな。」

「俺は龍崎茜。とある事情で昨日、4年ぶりに日本に帰国したんです」

ま、親父の作った借金を手っ取り早く返済する為、海外で傭兵をしてたなんざ口が裂けても言えねえわな。少なくとも、初対面の相手には。

「何処か外国に行ってたの？」

松永さんはずいとい俺の話に食いついてくる。

「うん、ロシアとかにですね」

「じゃあ、茜君がやっていたのはコマンドサンボかな」

やはり、見当はついていたみたいだ。この人、かなりの実力者の予感がする。

………なんと言うか、モモ先輩と互角にやりあえるんじゃないか？ そんな気がしてならないんだ。

「それで合ってる。何でやってるのかって、やっぱり………知りたい？」

「知りたい！」

即答ですかそうですね…。思わず苦笑してしまった。

ピキッ！

ん？ 苦笑いしただけで顎から小さな音が鳴ったぞ？ 4年も笑ってなかったっけなあ。

意外と俺は、松永さんの雰囲気から安心感を覚えているみたいだ。

「スペツナズって、知ってます？」

「ロシアの……特殊部隊みたいな集団だっけ？」

「そう、そのスペツナズです。俺は、スペツナズの元隊員だった人に特訓されました」

実際は嘘だったりする。だって俺自身がスペツナズの元隊員だもの。いや、多少の罪悪感はあるよ？ けどね、初対面の人に「ロシアの特殊部隊の元隊員です！」なんてやっぱり言えないだろ普通は。

「な、なんか君の経歴がすごく気になったよね…」

「はは、詳細はあまり言えないですけどね」

俺が珍しく軽く笑うと松永さんは少しだけ頬を染めた。というか店内の女性の視線が怖い。

そんな感じで数十分、おおよそ30分くらい松永さんとお茶していた。頼んだエスプレッソのカップももうすっかり空になっていた。その間松永さんから赤外線で番号とアドレスを交換する。アドレスに英字で納豆と入っているあたり、この人の人柄が少しわかる。

…地味に今の携帯登録第1号が松永さんだ。日本に帰るからって、予め買っておいたんだよね。

うん、結構嬉しかったりする。

「あ、そろそろ売り出しに行かないといけない時間だ！」

少し慌てたような声を上げた。そっぴや納豆がなんとやら言ってたね。この人。

「納豆のですか？」

「そうだよ。あ、茜君にもあげるね！ 試食ワンカップ！」

またニツコリと笑って先輩が懐からカップを取り出す。…常に持ち歩いているのか。

「ありがとうございます。じゃあ松永さん、また縁があれば」

「燕さんでいいよん。じゃあメールしてね！」

「あ、俺の奢りで大丈夫ですよ」

松なぐ：燕さんにそう言っていると、手を振って去って行った。

なんというか、明るいい人だった。裏の世界で生きてきた自分には眩しい光のようで。

そんな事を思いながら、俺はレジで精算するのだった。

第2話 茜は燕に出逢った（後書き）

後書き劇場

書き終わりました。なんか、書きはじめてからキーを打つ手が止まらなくなりました。

茜「死の前兆だな」

迅「なんでだよ！ 君はそんなジョークをかましてくるな！」

茜「ま、いい兆候なんじゃない？」

迅「それよりも、燕さんといいムードだね」

茜「そうか？ 普通だろう」

迅「（普通に思う人なら30分だけであんな熱心に話した後アドレ
ス交換とかしないってば…）はあ…この子、何処で間違えたんだ？」

茜「アンタがそうしたんだろうがああああああ！！！！」↑ 回
し蹴りを繰り返す

迅「ギヤアアアアアアアア」↑ 吹っ飛んで星になる

茜「次回も期待していただけると嬉しい。ぶっちゃけ、燕さんの口
調が合ってるかどうかは俺も作者もわからないが…」

お気に入り登録してくれた人やアクセスしてくれた諸君、本当に
ありがとう。再見！^{バイバイ}」

迅「（いや、そこはロシア語じゃなくて中国語なのかよ…）ドサッ」

第3話 茜893と一騎打ち？（前書き）

頑張って更新したいです！

第3話 茜893と一騎打ち？

茜Side

喫茶店を出た後、俺はと言うとまた先程と変わらず町をふらついていた。

燕さんが良い人だったし、割と今は機嫌が良い。と言っても、表情には出さないようにしているから大抵の人間には悟られるはずもない。

さてと、退屈だからと帰ってきた日本だが、今の所俺、身寄りが無いんだよなあ……。

4年前に龍崎家^{ウチ}が没落した時、親戚も殆どがどこかに逃げて行っただし、かと言って他に迷惑を掛ける訳にも……ねえ。

仕方ねえし、観光地の京都じゃなくて、大阪辺りでビジネスホテルにでも泊まるか……？

あと、今の俺は金だけは結構持っている。傭兵で報酬をよく貰っていたし……800万から1000万円くらいは稼いでいたはずだ。

うん……？ あれは一体なんだ？

先程の喫茶店辺りとは違って、ここらは閑散としていて人通りも少ない場所のようだ。

俺の視線の先では、見る限り鍛冶屋みたいな見かけの中年の男と派手な色スーツに身を包んだ5名の……所謂ヤクザが揉めていた。

「松永さあん……。借金の300万、さつさと返してもらえませんかねえ？」

ん、松永？ なんか心当たりがあるんだけど。……俺の気のせいかな。

な？

「ええつとつ、ちょっと待ってください。返す予定は今日の夜じゃありませんでしたっけ？」

松永と呼ばれたその鍛冶屋さん（仮とする）の男性は冷や汗を垂らして必死に弁明をしていた。

ふむ。この人は借金をしているのか。で、今取りたてを受けているが、時間を間違えている、とこういうことが。

「じゃかあしい！！ 昼も夜も関係あらへんねん！ さつさと借りた金返さんかい！！」

うわあガラ悪…。あの鍛冶屋さんがかわいそうに思えて来た。

なんか今日はワルに関わることが多いなあ。後で塩でも撒いとくかなあ。

「どーもおー！！」

若手芸人が登場してくる時みたいに飛び出してしまったが、まあ、こまけえこたあ良いんだよ！

あ、でも声が裏返ったのには軽く焦ったな。

「ん、なんやお前は？ 今ワシ機嫌悪いから、しょうもないこと抜かしよったらぶん殴るでえ」

所謂メンチを切られた。

「やってみるよ、オッサン」

ドスの利いた声を意識して挑発し、メンチを切り返す。

「ほお…。ゆうたなあクソガキ。ワシは女や子供でも容赦せえへん。…松永さあん。丁度ええわ。ワシらに逆らうところ言う風になるんや。よう見ときい」

「またわかりやすいフラグを……」
俺は目を瞑ったままオッサンの繰り出した手刀^{ドス}を引き寄せて白刃取りし、そのまま勢いを利用して投げる。

ドッサア！

屈強なオッサンが若い俺に投げられたのを見て周囲は一瞬啞然としていたが、気を取り直してその仲間たちも攻撃して来た。

……まあ弱いし、目を瞑ったまんま相手をしたよ。

何か得物を持つてる場合は無刀取りで無力化して頭突きで、相手が拳の場合は足払いや払い腰で簡単に済ませる。

正直弱すぎて暇つぶしにもならない。期待はずれだ。

「あ、あの。君？」

あ。…鍛冶屋さんのこと忘れてたな。うん。

「はい？」

「とりあえず助かったよ。ありがとう」

お礼を言っていただけるのは嬉しい…だが。

「いえいえ。まあ、一応数時間気絶するようにしましたけど、ちょっと場所替えましょうか」

893の屍（残念ながら死んでない）を見据えつつ提案したが、鍛冶屋さんは首を縦に振り頷いた。

昼飯時な上にまだ飯も食っていなかったので、鍛冶屋さんとラーメ

ン屋に入った。

「はっはっは！ 本当に助かったよ。ありがとうね！」

先程とは打って変わって鍛冶屋さん（名前を聞いたがやはり松永久信と名乗っていた。やはり本職は鍛冶屋らしい）が愉快的口調になつていた。

ま、こつちが素なんだろう。

「いえいえ。でもなんでまた300万円も？」
こいつがそもそもの疑問。

「いやゝ。株で失敗してね。それで金借りてた先が借用書をヤクザに譲渡しちゃったのよ。酷いよねえ」

ふうむ…。株ねえ。どうしても4年前の嫌な記憶がよぎるが、まあ良い。

「でも、あの様子だとまた夜頃に来るんじゃないですか？」

素朴な疑問というか、当然の指摘だったのだが…。松永さんの顔が蒼白になつて行つた。

お、おい…。まさかこの人…。

「忘れてた…」

とorzな状態になる松永さん。やつぱりつつか、えええ！？ 300万どうすんの！？

「うわああああ。どうしよう茜君！ おじさんまだ死にたくないよ！？」

どうやったら初対面の少年に泣いて縋る中年男性の構図が出来上がるんだろつ…。今一番の疑問だよ。

「まあ、秘策考えますから、とりあえず泣くのを止めてください」
貯金切り崩したら300万円程度、どうにかなるが…。
いくら昔のことがあつて借金してる人を見逃せないつつても、立
て替えるとなると厳しいしなあ。
なにか決定的な理由はないものか。

とりあえずは、その日の夜になるのを待った。

第3話 茜893と一騎打ち? (後書き)

後書き劇場

この調子で定期的に更新できるように頑張ります。

茜「まあそろそつだな。頑張れ」

迅「うん、君も燕さんとの仲を頑張れ」

茜「また懲りずに言いやがる。いい加減にしやがれ」

迅「あれ? 前までならこのへんで蹴りが来ていたはずなのに」

茜「まあ、機嫌が良いから多少は多めに見よう」

迅「真剣で!? じゃあ親公認になれるよう頑張つて!」

茜「? とりあえずやつぱり蹴り足りないから前言撤回する…。シベリアまで飛んでいけ」

迅「え、嘘、真剣で!? ってぎゃあああああああああ!」

茜「マンネリ化が早くも露呈しているぞ、おい…」

まあ、次回に期待してほしい。どうなるかはそれこそ作者次第だが」

第4話 茜の秘策（前書き）

マイクロソフト社のワイヤレスマウスが反応しなくなった…。
と言っわけで昔のVAIOのボールマウスを使っています。

第4話 茜の秘策

茜Side

ラーメンを食い終わると、とりあえず久信さんに家の場所を記したメモを貰って今はまたブラついている。

とりあえず新しい私服などを買った。軍服を羽織ったままと言うのも…ね。

それに最新のMP3プレーヤーとかも欲しかった。……ちなみにipod-touchだ。

まあ、本当はそれ以外にも沢山していたんだけどね。

6時半には夕飯とかも食ってたからまだ7時前だ。

もうそろそろヤクザが襲来する可能性が高いし、メモに書かれた通りの道を行こうか。

表側の通りは人通りも多く明かりがあって、京都の町並みも映えていた。

しかし、細い道に入っていくにつれて人数が減り明かりも消えて、不気味な暗闇が視界を支配するようになって来た。

すると、とあるアパートの前に「如何にも自分がヤクザ」というあからさまなだっせえスーツを来た集団が見えた。数は20から30と言ったところかな。

昼間に相対した奴らの姿はない。まあ、1日2日は寝込むくらいの攻撃をしたからなあ。

その所為もあってこの人数なら合点が行くが。

むしろ起きててこっち来てたら驚く。モモ先輩くらいしかそんなこと出来る人居ないし。

……！？

俺は一瞬自分の目を擦ったよ。幻覚見てるんじゃないかって思ってるん？ 「なんでそう思ったのか」だって？

理由は簡単だよ。俺の目線の先には、午前中に逢った燕……居たからだ。

松永って言う苗字でまさかとは思っていたけど……。

ヤクザの中でも格が上のような男……体格だけの男が何かを言っている。

「松永の嬢ちゃん。アンタの親父さんが借りた金払われへん言いよるさかい、ウチら仕方なくアンタを連れて行くことにしたんやわー。ごめんなあ。恨むんやったら親父さんを恨みい」

！？ こいつ今なんつった？ 燕さんを連れて行く……？

その言葉を聞いた瞬間、俺の中で何かが切れる音がした……。

「В а т а к у с т а л ь н ы м и р я д а м и （鋼と固く隊伍を組んで 我らは戦いへ赴かん）」

俺が歌っている歌は、ロシア……旧ソ連からの軍歌、モスクワ防衛軍の歌だ。

静寂の暗闇の中に響くアカペラの歌。奴らが俺の姿を捉えるのは至極当然だろう。

「どうもこんばんは。少女に数十人がかりで押しかける、情けない糞野郎共」

なるべく、挑発的で相手の怒りを駆り立てる言葉を選ぶ。理由は……。

「あ、茜君!？」

燕さんが驚いた様子で俺の方を見ていた。

「調子にノンな坊主ウウウウウ!!!!」

それとほぼ同時に1人の掛け声で4人くらいが一気に飛びかかってくるが、焦らない焦らない。

それぞれの攻撃を避け、急所2箇所くらいを均等に攻撃しておく。

さっきの理由だが、起こって感情の赴くままに戦う人間ほど動きを読みやすいものはないからだ。

向かってくる男の集団を、俺のすべての技を使って打ちのめしていく。

いやあ、ロシア出て中東に行ってから刺激が足りなかったし、丁度良いストレス発散だ。

俺の前には屈強な男たちの色とりどりの屍（やはり死んではないけど）の山が築かれて行く。

さっき燕さんにあーだ言ってた俺を怒らせた張本人である脳筋の顔が蒼ざめて行ってる。……ざまあねえな。

これだけの相手を1人で相手した為、實力は知らしめたみたいだ。即座にその脳筋も行動を取る。

燕さんを人質にしたのである――。

左手に拳銃――ロシアのトカレフを握って燕さんの頭に突きつけている。

「おい動くなアアア！ この嬢ちゃんどうなつてもええんかい坊主ウ！」

おいおい……。汚い手を使うなあ。この脳筋。でもおかしい。燕さんは十分、この程度の人間ならばっ飛ばせる筈だ。でも何もせずされるがまま。

行きつく答えと言えば……。俺の実力を測ろうとしているのかもな。

薄々そんな気がしたので、俺は腰に付けていたストラップ付きのナイフを取り出す。

それを見ると、脳筋は吐き気がするような意地の悪い笑みをニヤリと見せた。

勝利を確信したんだろうか。その笑みに対して俺も嘲笑を返した。あまりにも愚かに思えて。

「なあオッサン、知ってるか？」

嘲笑とこの言葉で、意地の悪い笑みが怪訝な表情に変わる。

「なんや」

「このナイフってさ、刀身が飛ぶんだよねえ！！！」

ナイフ、つまりスペツナズナイフのストラップを引っこ抜く。

スペツナズナイフとは、ロシア語で言う弾道ナイフ。

特殊部隊のスペツナズが使用していたと言う噂からその名で呼ばれているが、アメリカなどではバリステックなふという名称を使用する場合も多い。

そのナイフの刀身は勢い良く脳筋の左手に躍りかかる。

「！？」

表情が驚愕に染まる脳筋。

左手の甲から貫通したように見えた。血飛沫がアスファルトにぶちまけられ、トカレフが地面に落とされている。

「ひ、ひい!!」

俺が近づくと、悲鳴を上げて後ずさりしようとするが、その後ろには先程のトカレフを拾い上げ、笑顔で燕さんが。

「殺しはしねーよ。で、久信さんが借りてたのって300万で間違いないのか？」

「は、はい」

脳筋は大きさに縦にがくがくと首を振っていた。

「そうか、じゃあ、この貯金通帳に300万ちよつき入っている。もうこれで良いか？ 用が済んだらさっさと消え失せろ」

殺気を混ぜた視線で脳筋を軽く脅しておく。

「は、はいい！ か、確認しました。失礼します!!」

脱兎の如く。とはまさにこのことだろう。男は仲間をほったらかしにして逃げ去って行った。

まあ、松永家借金騒動は幕を閉じたな。めでたしめでたし…。

「なんで茜君がおとんと家の場所知ってるの!？」

…で終わるはずがなかった。

第4話 茜の秘策（後書き）

後書き劇場

迅「眠い」

茜「つかお前テスト一週間前だろ？ 大丈夫かよ」

迅「まあ、なるようになる」

茜「なんだその適當さは…。そして、なんで俺はスペツナズナイフを普通に使ってるんだ？」

迅「いやーニ。ニコ動画でバリスティックナイフを作ったっていう内容の動画があってね。ロシア関連だしこりゃあ良いって思って」

茜「本当に適當だなあおい！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5022y/>

真剣で茜に恋しなさい！

2011年11月26日23時47分発行